

風景論から風景の政治学へ

西田正憲

1. はじめに
2. 風景論の変遷
3. 風景論の多様な展開
 - (1)風景の生成論
 - (2)風景の構造論
 - (3)風景の評価論
 - (4)風景の操作論
4. 風景の政治学
 - (1)風景評価に関する様々な背景
 - (2)国立公園にみる風景の政治学

1. はじめに

人間は様々な環境に注目し、その環境を分節し、意味付け、価値付けることによって、風景として捉えてきた。風景とはひとつの見方である。どのような環境をどのような風景として捉えるかは、風土、社会、時代、文化などによって異なる。風景とは、主体である人間と客体である環境との相互関係のなかに生まれるものであり、人間は環境とのあいだに複雑に能動と受動が交錯する関係を取りむすぶ。風景は、人間と環境の双方に関係するものではあるが、注視・意識化、意味付け・価値付けによって生まれるように主として人間の内なる問題であり、主観性の領域に属するものである。しかし、環境にも図と地やゲシュタルトの法則などが読みとれるように—それは、や

論文

はり人間がそう見ているのではあるが一、また、環境なくして風景が成立せず、まなごしを向ける環境に類型があるように、風景が完全に人間の内なる問題というわけではなく、人間の外なる環境の問題でもある。風景論はこのように主として人間と環境、主体と客体、主観と客観などの問題として論じられてきた。

しかし、環境を意味付け、価値付けることによって風景化すること、つまり、風景評価の問題に関してみれば、人間と環境の問題にとどまるものではなく、そこには、社会、経済、文化などの様々な複雑な要因が影響しているといえよう。すなわち、風景評価の問題を考究しようとするれば、風景論の領域だけでは不十分であり、社会、経済、文化などの要因も視野に入れた領域からも考究しなければならない。風景の評価が否応なくある種の複雑な力学の場に組みこまれていることを、ここでは風景の政治学と呼ぶものである。風景の政治学は国立公園の事例に先鋭的にあらわれる。そこには、理念と現実、建前と本音、国家が言説で描く表象と現実の景観があらわす表象、外部のまなごしと内部のまなごしなどに大きな落差があり、乖離、矛盾、対立が渦まいていた。

本論は、風景とは何か、風景はどのように成立しているのか、どのような風景を賞賛してきたか、どのような風景を造りだすべきかという現在までの風景論を概観し、このような風景論を一步進め、風景評価に働く社会的、経済的、文化的な複雑な諸力を風景の政治学として、国立公園を素材に明らかにすることによって、今後、風景の政治学の研究が重要であることを説くものである。

なお、「風景」と「景観」の用語は厳格に区別できるものではなく、共に眺めや視覚像などを指ししめしているが、本論では、景観とは、環境の一面の主として視覚対象について、客体である対象にそくして語る用語であり、風景とは、同じ環境の一面について、主体である人間にそくして語る用語であると使いわけておきたい。いわば、景観が人間のより外なる問題であるのに対し、風景は人間のより内なる問題である。

2. 風景論の変遷

1894(明治27)年、地理学者志賀重昂の『日本風景論』が出版される。科学的に風景を論じ、日本人の風景観を伝統的風景観から近代的風景観へと大きく転換させ、アルピニズムを普及した点において、わが国の近代的風景論の嚆矢とされている。日清戦争の最中の出版でもあり、日本人のナショナリズムを鼓舞する。ジョン・ラボックの『自然美論』(1892)を範とし、フランシス・ガルトンの『旅行術』(1855)やバジル・チェンバレンらの『日本旅行案内』(1891)の翻案であったが、1903(明治36)年まで15版を重ね、その影響力には計り知れないものがあった。わが国の自然風景の特色を瀟洒、美、跌宕という抽象的概念で語り、故郷の美しさを称揚し、そして、何よりも国土を鳥瞰するまなざしによって、自然風景の成り立ちを気候、海流、水蒸気、火山岩、流水から解きあかしたところが衝撃的であり斬新であった。しかし、『日本風景論』は科学的に風景を説明する一方、漢詩文、和歌、俳句、山水画などを多数挿入することによって伝統的風景を強くにじませていた。じつは逆説的ではあるが、この混沌こそがこの著書の真価であった。伝統的風景をむしろふんだんに並べながら新しい風景を説いたところにベストセラーとなる由縁があった。しかし、世界を広く知っていた思想家内村鑑三の書評「志賀重昂氏『日本風景論』」(『六合雑誌』掲載1894)は、志賀を日本のラスキンと讃えながらも、世界にはもっと「偉大なる美」があると批判していた(内村1894:363-367)。明治後期には、風景論は様々な分野で語られる。漢学者久保天随の『山水美論』(1900)、山岳家小島烏水の『日本山水論』(1905)・『山水美論』(1908)、評論家・小説家伊藤銀月の『日本風景新論』(1910)などである。

江戸時代は日本三景が代表的なように海岸風景が賛美されていた。しかし、明治後期には山岳風景が台頭してくる。のちに日本アルプス登山の父と仰がれた宣教師ウォルター・ウェストンは、わが国に3度来日、足掛け17年滞在した親日家であったが、日本アルプスの登山を終えて、1895(明治28)年にイギリスに一旦帰国し、その翌年『日本アルプスの登山と探検』をロンドンで出版する。この著書も、『日本旅行案内』と同じように、わが国の自然風景の

論文

発見と普及に貢献する。ちなみに、『日本旅行案内』の日本アルプスを記述したのは、明治初期のお雇い外国人ウィリアム・ガウランドとロバート・アトキンソンである。ガウランドは「日本アルプス」の命名者である。わが国の近代的風景はイギリス人という外部のまなざしによって見いだされていった。

『日本風景論』が象徴的なように、明治後期において風景の見方に劇的な転換をもたらしたのは科学のまなざしであった。『日本風景論』の前年の1893（明治26）年に画集『欧州山水奇勝』を刊行した日本画家高島北海もまた地質学と森林植物学の自然科学の素養を身につけて、山の構造、地殻の構成、木の形態、水の系統などを厳密に描くべきだと考えていた。この時期に風景の見方に大きな変化をもたらしたもうひとつの影響は自然賛美を押しすすめたロマン主義のまなざしであった。文学の世界に顕著にあらわれるが、徳富蘆花『自然と人生』（1900）や国木田独步『武蔵野』（1901）が森林や田園の美を捉え、島崎藤村が『落梅集』（1901）などでラスキン流に雲を描写し、詩情あふれる表現で新たな見方を普及していく。美術の世界でも、洋画家浅井忠はバルビゾン派流の田園景の絵画《春畝》（1888）を描き、洋画家大下藤次郎は磐梯山、上高地、尾瀬、甲州白峰、十和田湖（1906－1910）を水彩で美しく描く。

彼らが受容した西欧文明の近代的風景観とは、ロマン主義に彩られるものであるが、根底に自然科学がよこたわっていた。18世紀にヨーロッパ・アルプスの表象を暗黒の山から栄光の山に反転させたのは、何よりも自然科学の力であった。自然風景を語る言葉は地形地質、植生、自然現象などの科学の言葉となっていく。18世紀の崇高やピクチャレスクの自然賛美の概念もそのような科学のまなざしの基盤の上に定式化されていた。わが国においても、新しい文学や美術にとっては、歌枕などの名所の風景はもはや必要ではなかった。自己の内面を投影し、新たな自然美を追求するには、アノニマスな自然風景がふさわしかった。故事来歴の特別な意味をもった場所よりも、ロマン主義の詩人ワーズワースのいう「人生の幽音悲調」（The still, sad music of humanity）が漂う抒情に満ちたアノニマスな自然風景を欲していた。

大正・昭和時代になると、自然科学の発展とともに、風景美を科学的に明らかにしようという動きが盛んになる。その風景美はロマン主義が見いだし

た山岳、森林、湖水、溪谷などが中心であった。林学の新島善直・村山醸造『森林美学』（1918）、地質学の渡邊十千郎（萬次郎）『風景の科学』（1924）、造園学の上原敬二『風景雑記』（1924）・『日本風景美論』（1943）・『風景読本』（1949）、地質学の脇水鐵五郎『日本風景誌』（1939）・『車窓から見た自然界』（1942-44）・『日本風景の研究—名勝の自然科学的考察』（1943）、景観地理学の辻村太郎『景観地理学講話』（1937）・『日本の景観』（1958）・『日本の山水』（1958）などと続く。地理学は、近代地理学の誕生から、また、のちに景観地理学を打ちたてるように、景観を読みとくことが学としての大きな課題であった。もっとも、科学のみならずフランス文学・評論家の吉江喬松『山岳美観』（1935）などもあった。並行して風景をも論じる雑誌『ツーリスト』（1912）、『庭園』（1918）、『国立公園』（1929）、『風景』（1934）なども発刊される。これらは、『日本風景論』と同様、今日の風景論とは異なり、国土景観論、自然景観論ともいべき環境に関する科学的景観評価が中心であった。以後、近代の自然風景の評価は、科学的な見方がやがて審美的な見方を招来するという構造をもつこととなる。自然風景はその後ますます科学的に貴重な地形地質や植生が一層美しい風景となっていく。

一方、このような科学的景観評価とは西欧の近代的風景観の移入でもあったことから、日本古来の伝統的風景観を再評価しようとする反動がおきる。歴史学の内藤湖南（虎次郎）『日本文化史研究』（1925）、思想家・評論家の保田與重郎『風景と歴史』（1942）などであり、この系譜は戦後も思想家・評論家の唐木順三『日本人の心の歴史』（1970）などへと続き、わが国固有の伝統的風景の秀逸さを説くこととなる。風景とは、観光旅行が典型的なように非日常世界の未知の風景に最も注視し、いつも見る身近な日常世界の既知の風景には注視しないが、伝統的風景の見直しは、既知として忘れさられた風景を今一度未知のものとして再発見しようとする試みであった。また、歴史学の長谷川成一『失われた景観—名所が語る江戸時代』（1996）、文学の川村晃生・浅見和彦『壊れゆく景観—消えていく日本の名所』（2006）なども近世以前の名所の保護と破壊の歴史を紹介する。

現代になると、風景に関する論考は広がり深まりをみせ、哲学、文学・

論文

文芸評論、美術史、地理学、社会学、歴史学、景観工学、建築学、都市計画学、造園学などの分野で風景論が多様に展開し、大きな進展をみせる。

3. 風景論の多様な展開

現代の多様に展開する風景論をここでは、風景に関する論点を整理することによって、次の4つに大きく図式的に分類して論じることとしたい。

① 風景の生成論

風景はどのように誕生するのか。人間にとって風景とはそもそも何か。人間にとって風景はどのように立ちあらわれるのか。

② 風景の構造論

風景はどのような構造をもっているのか。風景はどのように構成されて成立しているのか。

③ 風景の評価論

人間がどのような環境に注目し、どのような見方で、どのような風景として捉えるのか。人間がどのような風景を賞賛してきたのか。

④ 風景の操作論

人間が環境を操作し、どのような風景を造りだしてきたのか、あるいは、どのような風景を造りだすべきか。

このような考え方に類する風景論は様々な研究分野によって論じられてきた。様々な研究分野はこれらの風景論を個別に閉じた領域として論じるものではなく、交差しながら横断的に論じるものではあるが、研究分野によって自ずと重点のかかり方は異なっている。もっとも、構造論を論じるには生成論の理解が前提であり、評価論を論じるには構造論の理解が前提であり、操作論を論じるには評価論の理解が前提とならざるをえない。

(1) 風景の生成論

哲学・社会学のゲオルク・ジンメルは論考「風景の哲学」(1913 邦訳『ジンメル著作集12』所収 1976)で、自然を構成する個々の要素を超えたひとつの新しい全体が意識されるとき、風景は初めて誕生するものだとして、風景

とは視覚的、美的、情緒的に統一体として再形成されたものであり、この統一をもたらすものは主体の表出である「気分」だとしていた。風景とは、物象を超えて、主観性をおびたものであり、まさに主観が風景の世界を創りだしているのである（ジンメル 1976：165－179）。この統一した全体性は西欧の哲学にとって風景と深く関わり、つねに重要なテーマであった。哲学のヨアヒム・リッターは論考「風景—近代社会における美的なものの機能をめぐって」（1963 邦訳『風景の哲学』所収 2002）で、「風景とは、感情と感覚をもって観照する者に対して、眺望の内で美的に現前するような自然のことである」と定義し、西欧において「風景」が誕生するのは近代であり、それは、自然科学の誕生によって引き起こされた自然と人間の分裂構造に密接にむすびついていると指摘する。すなわち、自然が神的な全体的なるものから、自然科学によって個々の物質と現象に分断されるが、今度は美的享受という風景によって再び全体的なるものをとりもどすのである。風景は人間が全体的自然をとりもどすための関係構築であり、神的なものを喪失した近代にあっては、人間はその不安から、自然の美的享受としての風景を発見せざるをえなかったのである。人間は失われた自然の全体性をとりもどし、自然からの疎外感を風景という美的享受で補うのである（リッター 2002：205－216）。

風景の生成論は風景の発見や誕生として様々な分野で論じられてきた。歴史学のヤコブ・ブルクハルト「イタリア・ルネサンスの文化 一試論」（1860 邦訳『ブルクハルト』所収 1966）は風景美を発見したのはイタリア・ルネサンスであると指摘し（ブルクハルト 1966：340）、地理学のオギュスタン・ベルク『日本の風景・西欧の景観』（1990）は風景の観念を生みだしたのは16世紀近代初頭であることを指摘し（ベルク 1990、53）、美術史のケネス・クラーク『風景画論』（1949 邦訳 1967）は風景を目的とした風景画の制作を試みたのは17世紀であると指摘していた（クラーク 1967、203）。イタリア文学のピエーロ・カンボレージ『風景の誕生—イタリアの美しき里』（1992 邦訳 1997）もイタリア・ルネサンスの自然と人為の結合としての風景の誕生について論じていた。風景は近代になって見えてきた。人間（主体）が環境（客体）から距離をとり、身を引きはなすことによって環境を対象化でき、風景が生

論文

まれた。ベルク『風土としての地球』(1994)はこれについて、「西洋人の精神構造に風景が登場したのは、主体がその風土から離れることの感覚的な現れであり代償としてであった。しかもこの同じ距離のとり方から近代科学の客観的視点が芽生え個人主義もまた芽生えることになったのである」と述べている(ベルク 1994:80-81)。ベルクはさらに『空間の日本文化』(1985)・『風土の日本—自然と文化の通態』(1988)・『風景という知—近代のパラダイムを超えて』(2011)などで、風景概念を明確にし、風景のコード化など文化論的分析を行っている。

地理学の山野正彦『ドイツ景観論の生成—フンボルトを中心に』(1998)によると、ヨーロッパにおける景観概念は、ルネサンス以降、合理的・科学的な世界を見る見方として生じ、風景画の発展と並行して生成してきたという(山野 1998:18-44)。景観概念は、15世紀末南ドイツの画家アルブレヒト・デューラーに発し、17世紀オランダ風景画の発展とともに確立していく。山野は、18世紀末から19世紀前半にかけて、ドイツ・ロマン主義風景画と、アレクサンダー・フォン・フンボルトを嚆矢とする近代地理学が連動して、新しい世界の見方を切りひらいてきたことを論じているが、ドイツでは、この時期に、景観概念が一般化し、現実の風景そのものを指すものとして、文学や旅行記などにみられるようになったという(山野 1998:27)。前述のリッターもまたフンボルトこそはコスモスを捉えるヨーロッパの伝統的テオリアを継承して、自然科学によって分断された自然に対し、美的享受の融合によって再び全体性をとりもどす方向へ転回したと評価していた。(リッター 2002:205)

わが国においても、風景の発見・成立について、勝原文夫、柄谷行人、田中正大、木股知史、加藤典洋らが深く考察している。農村風景研究家の勝原文夫『農の美学—日本風景論序説』(1979)で、旅行者的審美的態度と定住者の審美的態度、探勝的風景と生活的風景という図式を提示することによって、風景を発見する構造を明らかにしている(勝原 1979:19-21)。評論家の柄谷行人『日本近代文学の起源』(1980)は「『風景』が日本で見出されたのは明治20年代である」と指摘し、国木田独歩の武蔵野の発見を論じて、風景とはひ

とつの認識的な布置であり、価値の転倒が生じて、発見の起源が隠蔽されるという風景の本質を論じた(柄谷 1980:17)。造園学の田中正大『日本の自然公園』(1981)は、尾瀬、上高地、十和田湖、大雪山などのわが国を代表する自然風景地の発見過程について明らかにした(田中 1981:第3章)。文学の木股知史の『〈イメージ〉の近代日本文学誌』(1988)は、「風景の詩学」として、近代の自然の捉え方や風景のあらわし方を表現者の位置や視野の枠組みの問題から詳細に論じた(木股 1988:61-101)。評論家の加藤典洋『日本風景論』(1990)は、これらの考察を敷衍して、「武蔵野の消滅」で、1890年代の『日本風景論』、1970年代の「ディスカバー・ジャパン」などにみる日本の風景の発見の構造を鋭く分析した(加藤 1990:155-201)。この他、文芸評論家の奥野健男『文学における原風景』(1972)、哲学の沢田充茂『認識の風景』(1975)、評論家の猪瀬直樹『ミカドの肖像』(1986)、思想家の内田芳明『風景の現象学』(1985)・『風景とは何か』(1992)・『風景の発見』(2001)、地理学の千田稔他『風景の構図』(1992)・『風景の文化誌』(1998)・『風景の事典』(2001)なども近代における風景の概念や風景の発見などについて論じた。さらに、社会学の佐藤健二『風景の生産・風景の解放—メディアのアルケオロジー』(1994)はメディアや交通などの観点から風景の生成、変容、流通について論じた。風景は文学、美術、映像など多様な文化にとりあげられる。文化が風景を発見し描出するとともに、一方で、風景が重要な契機となって文化を創りだす。風景を捉える文化、風景が素材となる文化を風景文化と呼ぶならば、小説、随筆、詩歌、紀行文、風景画、写真、映画などのメディアのほか、風景を信仰の対象とする宗教、風景を権威付ける景観保護制度、非日常的な風景を追いもとめる観光などもまた風景文化であろう。和歌や俳句はわが国に特徴的な風景文化であり、一方、哲学や思想は欧米に特有な風景文化といえるかもしれない。風景文化論や比較風景文化論は今後の課題であろう。

風景をまず発見するのは、外部のまなざしであって、内部のまなざしではない。非日常の世界を楽しむ観光は外部のまなざしを示す典型である。内部のまなざしには日常的な身のまわりの風景は見えていない。しかし、やがて外部のまなざしに触発されて、内部のまなざしもまた生活の風景を注視しは

論文

じめる。この風景発見の同じ構造は、日本の近代的風景の欧米人の発見のように、歴史的に様々な局面でみることができる。現在の産業景評価も、時代の枠組みが変わることによって、内部の風景が外部の風景へと変化したことによって生じている。原風景あるいは故郷の風景と呼ばれる風景も、この風景発見と同じ構造にある。内部に棲みついているとき、それに気づかないが、身を引きはなしたとき、既知の風景が未知の風景になり、その風景に気づくのである。内部の人間も空間的にも時間的にも距離をもって、風景を相対化できるとき、その風景に気づく。既知の風景が未知の風景になることによって風景が生成する。風景の発見にとって重要なことは、身の引き離しであり、対象化することであり、既知の風景を未知の風景に変えることである。それは主体と客体の距離の問題であるといえる。

風景の発見と定着は文化の作用にほかならない。風景は文化的な所産である。風景の最初の発見は、時代を先取りする天才的な芸術家の仕業であろうが、やがて多くの人々が発見し、集団のあいだで定着していく。それは文化の作用である。たとえば、わが国では、西行や芭蕉、国木田独歩や島崎藤村、東山魁夷や平山郁夫などの天才的芸術家が先鋭的に風景を見だし、人々はその表現された風景に共鳴し、やがてその風景を規範として広く普及していく。

(2) 風景の構造論

地理学の前述のオギュスタン・ベルク『風土としての地球』(1994)は「風景には目に見える環境が不可欠の要素であるとしても、風景とは同じく必然的に一つの物の見方なのである。それは見られるものに属するのと同様に見ることに属し、客体と同じだけ主体に属する」といい、それゆえ「風景を自然に還元することは、従って幻想である」と述べ、「主体を客体に還元し風景を環境として読み取ろうとする幻想」を批判する(ベルク 1994: 80)。風景は主体と客体、主観と客観、文化と環境の双方に関係し、その両者を通態的に往来する構造をもっている。哲学の桑子敏雄『風景のなかの環境哲学』(2005)は、まず風景について「固有の配置から知覚する世界の相貌が風景である」「風景が世界と自己とを分け、そしてつなく」「わたしは風景を介して向こう側と

こちら側という空間的配置を知覚する」と語り、そのうえで「風景は主観的なものでも客観的なものでもない。風景とは主観と客観が成立する場、根拠を提供するものである」とむしろ風景が主観性と客観性を成立させていると述べている(桑子 2005: 211, 229 - 230)。

哲学の木岡伸夫の論考「沈黙と語りのあいだ」(『風景の哲学』所収 2002)は、生きられる風景が基本風景、原風景、文化的表現の三つの構造契機からなるとして、沈黙のうちにある風景、語られる風景、制度化した風景について論じ(木岡 2002: 37 - 56)、その後『風景の論理 沈黙から語りへ』(2007)でこれらの構造理論をより精緻に発展させた。

造園学の筆者『自然の風景論—自然をめぐるまなざしと表象』(2011)は「風景は、主体—まなざし—客体という構造をもつことによって、成立する。風景とは人間がある特定の見方をもったまなざしによって捉えられた対象の表象である。まなざしが見方を規定するということは、まなざしがひとつの文化モデルであることにほかならず、風景とは文化のプリズムや眼鏡を通して見るものであるととえることができる」と述べた(西田 2011: 324)。

まなざしは風景化する視線であり、意味付け・価値付けを内包した視線であるが、このまなざしの用語は、現象学のモーリス・メルロ＝ポンティ『知覚の現象学』(1945 邦訳 1974)などで、われわれが生きられる世界を見つめる視線として用い、構造主義哲学のミッシェル・フーコー『臨床医学の誕生』(1963 邦訳 1969)は、医師が患者の診断でおこなう独特の観察する見方、制度化された見方として用いた。さらに、社会学者のジョン・アーリ『観光のまなざし』(1990 邦訳 1995)は、フーコーのまなざしの概念を用いて、イギリスの近代観光において観光客が観光対象に向ける視線を主題化した。視覚は文化の産物であるが、近代のまなざしの特質については、美術史のエルウィン・パノフスキー『象徴形式としての遠近法』(1927 邦訳 1993)、思想家・美術評論の多木浩二『眼の隠喩 視線の現象学』(1982)、社会学の吉見俊哉『博覧会の政治学』(1992)、比較文明学の横山俊夫編著『視覚の19世紀』(1992)、写真家の大島洋編著『写真家の誕生と19世紀写真』(1993)、美術評論の伊藤俊治『ジオラマ論』(1996)、評論家・小説家のベルナルド・

論文

コナン『パノラマの世紀』（1993 邦訳 1996）、文学の李孝徳『表象空間の近代』（1996）などが雄弁に物語っていた。風景とは、歴史的社会的に文化として主体と客体つなぐものとして構造化されたまなざしによって、人間が発見し定着させるものであり、たんなる環境から人間が見いだすことによって生まれるものである。

風景には、切断する位相によって、いくつかの異なる構造を見いだすことができる。風景は、人間のなかで、個人的レベルから社会的レベルまで、また、古いものから新しいものまで、層をなしているとみることができる。風景は知覚や記憶として個人的・主観的なところにまず生成するが、一方、風景は心象や観念として集团的・客観的なものに昇華していく。また、個人的には過去の風景から現在の風景まで、社会的には伝統的風景から近代的風景までが、層をなして積層している。もちろん、この重層性はアナロジーにすぎないが、そう理解する方がわかりやすい。

先に、風景とは、環境の一面に対して、人間が注視し意識化して、意味付け・価値付けをおこなうことによって、捉えた対象の表象であると述べた。しかし、一般的に、風景には注視・意識化をしない風景、意味付け・価値付けをおこなわない風景もあることを理解しておかなければならない。人間の内部には、基層に、個人的風景がよこたわっている。それは、日常的風景であったり、主観的色彩がきわめて強い風景であったり、他者に伝わらない、あるいは、伝えにくい風景であり、多くは言説化されない風景である。一方、上層には、集团的に共有する風景が形成されていく。それは、非日常的風景であったり、文化の図式として定型化されていく風景であったり、他者に伝わる風景であり、言説化される風景である。多くの風景は個人的な風景にとどまり集团的な風景に昇華しないが、風景は、集团的に共有される契機を有し、図像や言説などを通じて集団のあいだに伝播して、集合表象を形成していく。風景観とはこのような動きのなかで形成されるものであり、風景観というときの風景はまさにこの集团的な風景である。集团的に共有する風景の形成は文化の作用にはかならない。風景は発見と定着の過程をへて、普及し、集団に共有されていく。

また、風景は、空間軸で大きく分けると、日常的な風景と非日常的な風景に分けることができる。人間は日常的風景を基層にもち、非日常的風景を表層にもつ。日常的な風景は生活景として通常は注視しないが、非日常的な風景は探勝景として注視する。生活景は無意識的な風景であり、探勝景は意識的な風景である。さらに、風景を時間軸で切れば、個人史の領域では原風景が浮かびあがり、人類史の領域では元風景が浮かびあがる。ここでいう、原風景とは幼少期に強く刻印された生活景であり、その後の人生においても、強く影響しつづける風景である。元風景とは、いわば人類の原風景であり、美しい風景や快い風景の原型としての人類共通の風景である。進化、防御本能、実存、深層心理などの観点から類推され、先験的風景とも呼ばれることがある。地理学のジェイ・アプトン『風景の経験—景観の美について』（1975邦訳 2005）のプロスペクターレフュージ理論はそのひとつである。風景に先天的な要素があるかどうかは難しい問題である。多くは文化という後天的な要素で決まるものとする。原風景は個人のみならず社会においても語られる。原風景はもともと個人史のレベルで生成するが、やがて、そのなかのある原風景が集団に共有されるものとして、個人的レベルから社会的レベルに上昇して、社会史のレベルで集団の原風景に昇華する。この風景も文化的な所産である。風景を最も上層の社会的レベルで論じれば、人間がどのような風景を好んできたかという文明史の視座をもつこととなる。

(3) 風景の評価論

自然風景の評価で特筆すべき事例をあげれば、ヨーロッパの古典的風景、崇高、ピクチャレスク、ロマン主義、アメリカのウィルダネス、そして、わが国の豊葦原、雪月花、花鳥風月、深山幽谷、幽邃、八景、白砂青松、長汀曲浦、奇岩怪石、山紫水明などがあげられる。欧米の風景はつねに形而上学のテーマでありつづけ、わが国の風景は形而下の具体的な物に即して語られてきたという相違はあるにせよ、風景とはひとつの見方にすぎないことがよくわかる。18世紀のヨーロッパで山岳の風景が反転したように、また、19世紀のアメリカで原生自然の風景が反転したように、さらに、明治後期の日

論文

本で自然の風景が転換していったように、風景とは環境を見るひとつの見方である。18世紀の山岳を美しい風景として捉え、展望景を楽しむ近代的視覚の普及については、地理学の西村孝彦『文明と景観』（1997）と山野正彦『ドイツ景観論の生成—フンボルトを中心に』（1998）が自然科学の発達と深く関連していたことを指摘し、ピクチャレスクの風景やロマン主義以降の理想的風景の成立については、英文学の富士川義之『風景の詩学』（1983）が論じていた。

ヨーロッパでは風景の問題は形而上学の大きなテーマでありつづけてきた。哲学、美学、美術史、文学などの分野において風景に関する究明がなされ、特に18世紀以降、賛美すべき自然の風景は何か、その自然の風景の本質は何かしがきりに論じられてきた。哲学のエドモンド・バーク『崇高と美の観念の起源』（1757 邦訳 2004）の「崇高」、牧師のウィリアム・ギルピンの『三試論』（1792）を核心とする一連のピクチャレスクな美を紹介した旅行記（1782-98）の「ピクチャレスク」はその典型である。このピクチャレスク概念は、イギリスのユヴァディル・プライス『ピクチャレスク試論』（1794）、リチャード・ペイン・ナイト『ランドスケープ』（1794）などでさらに深められていく。崇高の美的規範は、従来見向きもしなかった山岳、海洋、森林などへ眼を向けさせ、自然へのまなざしを拡大した。ピクチャレスクの美的規範もまた自然の風景を見ることを意識させ、眺望の探求をうながし、自然へのまなざしを深めた。崇高とピクチャレスクは、新たな自然へのまなざしを生みだし、その後のロマン主義の自然賛美へと道を開いていく。内面を投影する自然景を見いだそうとするロマン主義のまなざしは、当初の目的をはるかに超えて、様々な自然風景を見いだした。ロマン主義においてこそ自然は心地よく快適で甘美なものとなった。ロマン主義が、自然賛美をきわめ、自然へのまなざしを拡大し、深化したといえよう。

医師・画家のカール・カールス『風景画に関する9通の書簡』（1831 邦訳『ドイツ・ロマン派風景画論』所収 2006）は、ドイツ・ロマン派風景画の思想の綱領ともいえる画論を著し、理想とする風景画を大地の生命の芸術と名付け、アルプスの山脈、海上の暴風雨、広大な山岳や森林、火山や瀑布といっ

た崇高な風景とともに、大地の本性や神的理念を示す山岳を特別視していた。カールスは、自然に神秘的な生命をみて、自然を神の啓示とみなし、風景を神の顕現とみる。

現代のわが国においては、歴史人類学の太田幹雄『月瀬幻影—近代日本風景批評史』(2002)が江戸後期の漢学者や豪農が中国文化の影響をうけてわが国の峡谷、梅林、奇岩怪石などの風景を名所化していったことを詳細に論じている。江戸シノワズリと称する山水愛好の中国趣味が、漢詩文という言説の世界で、わが国の風景を題材に中国からの引喩の風景として広まるのである。美術史の青木茂『自然をうつす—東の山水画・西の風景画・水彩画』(1996)は明治20年代来日の3人のイギリス人水彩画家が日本人に生活風景や自然風景の発見をうながし、わが国の近代的風景画の成立に大きく寄与したと指摘している。外部のまなざしが内部のまなざしを触発したのである。地理学の荒山正彦「近代日本における風景論の系譜」(『〈景観〉を再考する』所収 2004)は日本風景論、国立公園、日本新八景が対象とした風景リストを論じ、景観工学の田路貴弘・齋藤潮・山口啓太『日本風景史』(2015)がヴィジョンとしてどのような風景を生みだしたいと思い、どのような風景を形成してきたかという観点から古代から現代までの風景史をまとめ、造園学の筆者『瀬戸内海の発見—意味の風景から視覚の風景へ』(1999)は瀬戸内海の風景評価を事例に伝統的風景観から近代的風景観への変遷を論じ、また、筆者『自然の風景論—自然をめぐるまなざしと表象』(2011)では自然史の風景から人類史の風景への変遷を論じた。

わが国の現在の風景の変貌や荒廃については、海外との比較、過去との比較で様々に論じられている。経済学の松原隆一郎『失われた景観—戦後日本が築いたもの』(2002)、東洋文化研究家のアレックス・カー『美しき日本の残像』(1993)・『犬と鬼—知られざる日本の肖像』(2002)・『ニッポン景観論』(2014)などである。

風景における記憶、郷愁、懐古などの問題も風景評価におおいに関係している。棚田や古民家や町並みが大切なのは、それらが現在世代の記憶のなかに鮮明にやきついていると同時に、それらが眼前から消失しようとしている

論文

からである。今、文化財として新たに評価されている文化的景観も、過去時代の記憶でもあるが、基本的には現在世代の記憶にほかならない。風景評価には風景のエゴイズムが働いている。われわれが慣れたしんだ風景こそが良い風景であって、残したい風景なのである。かりに過去世代や未来世代が好まない風景であっても、現在世代が評価すればそれは優れた風景なのである。人間はどんな風景にも慣れ、いつしか親しみさえおぼえるようになり、現在世代の風景評価をそのまま未来世代に押しつけることとなる。

哲学のヨアヒム・リッターは、前述したとおり、自然の全体性を取りもどすために風景という美的享受を発見し、それによって自然からの疎外感を補うことを指摘していた。このリッターの風景論について、哲学の菅原潤「風景美が引き起こすもの—リッター風景論を中心に」(『風景の研究』所収2006)はそれが「埋め合わせ理論」と名付けられたことを紹介し、さらにリッターの風景論のその後の展開を論じている。自然からの疎外感を美的に埋めあわせた風景の発見は、やがて一時的な幸福ややすらぎを求める保養や余暇へと移行し、風景の観光化がおきる。そして、この風景の観光化において、今度は、風景が人間には関係のない疎遠な自然として姿をあらわす。自然からの疎外を逃れるために自然の美的享受をおこなったにもかかわらず、観光化が進むことによって、自然は美的享受とは無縁な人間に疎遠な存在と化していくのである。菅原はリッターの風景論の本質は「自然からの疎外の廃棄と自然からの疎遠さへの回帰の間を揺れ動く運動」にあると指摘し、「この疎外感からの脱却と疎遠さへの逢着を繰り返すリッター風景論の構造」に、勝原文夫、木股知史、加藤典洋らが導いた風景発見のロジックを重ねあわせている(菅原2006:111-125)。風景を見いだすまなざしが探勝的风景から生活的風景へとシフトし、さらに次から次へと新たな風景を発見していく構造に、欠乏を埋めあわせるために風景の発見を果てしなく続ける循環を重ねあわせるのである。西欧の風景論は形而上学で語られ、つねに絶対的な神の存在が深く関与している。自然の風景に関する西欧の語りとはわが国の語りには大きな彼我の差があり、神の観念にはとまどいや違和感をおぼえざるをえない。しかし、リッターの埋め合わせ理論は人間が次から次へと新たな風景を

発見する構造をもっているという点について、風景の本質を突いているように思われる。われわれは古い風景を離れ、その欠乏感を埋めあわせるかのよう、次から次へと新しい風景を発見していくのである。風景は絵画や音楽やファッションのようにつねに新しい感覚を追いもとめつづけていくのである。風景には、古い風景にも新たな意味付け・価値付けをおこなうことによって蘇らせることもあり、螺旋状に循環しながら、次から次へと生まれるという本質がある。

(4) 風景の操作論

工学は景観を計画・設計・施工の実践に結びつけるために景観の分析を進める。人間がどのような風景を造りだしてきたのか、あるいは、どのような風景を造りだすべきか、つまり、風景を操作するために、建築、都市、土木構造物について居住空間、都市空間、土木空間はどうあるべきか、快適性、合理性、効率性、審美性などの観点から分析を進めた。アメリカの都市計画学のケビン・リンチ『都市のイメージ』（1960 邦訳 1964）は都市のイメージを構成する要素としてパス、エッジ、ディストリクト、ノード、ランドマークの5つをあげ、都市環境そのものではなく、都市環境に対する人間の印象を分析した。建築史の伊藤ていじ『日本デザイン論』（1966）、建築史・建築学の伊藤ていじ・磯崎新らの都市デザイン研究体『日本の都市空間』（1968）はわが国の伝統的空間を新たな視点と言葉で再評価した。この時代は世界的に経済成長に伴う都市環境の急激な変化が進んだ時であり、20世紀のル・コルビジェ以来の機能主義の近代建築を乗り越えようとする動きが出てきた時でもあった。工学といえは機能性などの技術的問題を対象とする学問領域のようであるが、景観に関する工学の本質は主体である人間をより見つめようとするものであった。景観工学の樋口忠彦『景観の構造—ランドスケープとしての日本の空間』（1975）・『日本の景観』（1981）はわが国の生活空間の景観について従来とは異なる類型を提示し、新たな景観論の発展に大きな刺激を与えた。

景観工学は、景観の分析概念を確立し、人間の視覚経験について計量化に

論文

よる景観分析をおこない、さらに、過去の優れた景観についても同様な分析をおこない、それらの結果を現実に操作概念として適用し、発展をとげてきた。もっとも、この根底には景観工学者の風景に対する優れた審美眼や感性があったのであり、彼らが風景の目ききを目指していたといえる。景観工学は景観に関して最も体系化を図った分野である。中村良夫らの土木工学大系編集委員会『土木工学大系 13 景観論』(1977)、篠原修『新体系土木工学 59 土木景観工学』(1982)はその典型である。視点(視点場)・視対象(主対象・副対象)、可視領域・不可視領域、近景・中景・遠景、視距離、仰観景・水平景・俯瞰景、シーン・シークエンス、場の景観・変遷景観、視線入射角、垂直見込角・水平見込角などは景観の分析概念・操作概念として普及している。環境影響評価法に基づく景観アセスメントや景観法に基づく各地の景観条例においても景観工学の考え方に依拠した手法が増えている。

しかし、中村良夫や篠原修らは景観工学の体系化を進めたのみならず、幅広い知見と奥深い考察によって、風景論の分野を拡大した。中村良夫は『風景学入門』(1982)で風景を集団表象として近世以前の文学、図会などから読みとく、篠原修編著『景観用語事典』(1998)は風景論の主要論点にも言及していた。特に中村良夫は『風景学・実践編—風景を目ききする』(2001)・『風景を創る—環境美学への道』(2004)など多数の著書を出し、多大の影響力を及ぼすとともに、優れた門下生を数多く輩出した。齋藤潮『名山へのまなざし』(2006)は古来日本人の山岳の見方を解きあかし、小林亨『移ろいの風景論』(1993)は五感と言葉から移ろいの風景を論じ、岡田昌彰『テクノスケープ—同化と異化の景観論』(2003)は産業景観を評価し、景観形成における同化と異化の手法を明らかにした。景観工学の風景論研究の裾野は広く、前述の『日本風景史』(2015)では田路貴浩、吉村晶子、山口敬太らの気鋭達が風景論の拡大と深化を進めている。

現代空間を論じる風景論もある。テーマパークはシミュラクルな別世界として多くの人々を魅了している。現代建築の粋を集めた美術館やリアルサイズの再現展示をする博物館、大規模ホテルや大型ショッピングセンターなどの大型商業施設、さらに、長時間内部で過ごせるよう配慮された国際ハブ

空港なども同様に現代人にとって快適で魅力的な空間である。これらに共通することは、外観の印象は重視されず、内部にテーマ性をもった独特の濃密な空間を生み出すことである。内部のインテリアの風景が重視され、外観のエクステリアの風景は軽視されていく。建築家ジョン・ジャーディは、このようなテーマ性をもった空間創造をオブジェクトメイキングからプレースメイキングへの変化と称し、1996(平成8)年のキャナルシティ博多、2003(平成15)年の六本木ヒルズとなんばパークスなどを生み出した。この動きを建築学の中川理『風景学—風景と景観をめぐる歴史と現在』(2008)はこれらを仮構される風景の創出と分析し、閉鎖的内部空間の創出に凝集することで外観の風景の公共性は失われていくとともに、来訪者はそこで自分が風景になるという新たな風景の生成を考察する。そのなかで「自分自身も風景の要素となり、風景と一体となってしまうという、風景に包み込まれることを願うまなごしの欲望」や「風景の中にいる自分を見出すことで、風景を認識しようとする人々の新たなまなごし」があることを指摘している(中川2008:143-192)。ここには自分自身をも風景として見るという風景論のアポリアが提起されている。

4. 風景の政治学

(1) 風景評価に関する様々な背景

風景評価には人間の問題のみならず、当然、社会的背景、経済的背景、文化的背景などの問題もある。前述の哲学のヨアヒム・リッターの埋め合わせ理論は、自然の美的享受である風景の生成には自然の全体性の享受を破壊する自然科学の台頭という社会的・文化的背景があったとみていた。

英文学のマージョリー・ニコルソン『暗い山と栄光の山』(1959 邦訳1989)で、イギリスの科学、哲学、文学をたどり、山岳の見方の変化は、17世紀末から18世紀にかけておこったと指摘する。ニコルソンは、1681年に初版がでた自然神学のトマス・バーネットの神学と科学の書『地球の聖なる理論』を重視し、これをきっかけに以後、人々は自然の偉大さに目覚め、山岳のイメージも暗い陰鬱な山から栄光の壮麗な山に変わっていったと論じる

論文

(ニコルソン 1989：主として第5章)。山岳風景を美しいと見る見方にも科学の台頭という背景があった。リッターとは逆に科学が自然美を引きだしたとみている。

18世紀の崇高とピクチャレスクの美的規範はロマン主義の自然崇拜の開花に寄与する。ヨーロッパで18世紀末から19世紀にかけて文学、美術、音楽、哲学などでおこるロマン主義は、均整と調和を重んじた古典主義に反発し、自由な感情や想像の発露を謳歌し、人間の内面の心の動きに眼を向け、同時に自然に対しても、内面を投影する対象として広く深く眼を向け、自然崇拜ともいべき自然賛美を押しすすめる。ウエルギリウスの風景からワーズワース的风景へと称されているところである。ここには、市民社会の進展が自由な個人のまなざしを生み、産業革命の進展が反動として人々の自然崇拜を強めるという背景があった。

地理学の西村孝彦『文明と景観』(1997)は、ヨーロッパにおける山岳の美的イメージは18世紀後半から19世紀前半の50年から100年のあいだに、まず、貴族やブルジョアジーの山岳見物としてはじまり、それが中小ブルジョアジーに広まり、やがて、大衆の山岳観光として普及したと指摘し、そのイメージはヨーロッパが創った文化モデルであり、ヨーロッパ近代社会という世界史上の1特殊社会が創りだした「生産物」ないしは「発明品」だと称している(西村 1997：185-220)。観光の大衆化は上流階級の術示と中産階級の模倣ともいえる。

美術史のバーバラ・ノヴァック『自然と文化』(1980 邦訳 2000)は、1825年頃から75年頃の約50年間にかけて、アメリカの風景画家たちが自国の壮大な自然の風景を捉え、自然の偉大さを感動的にあらわしていたことを詳細に論じている。その最盛期は1850年から60年の約10年間にあったと指摘し、アメリカ風景画の偉大な時代を文化的文脈から解明した。ノヴァックは、当時のアメリカにとって、自然は天地創造の神の摂理をあらわすものであり、さらに神の顕現そのものであり、風景画家たちはその自然の崇高で神聖なるものを啓示し創造する使命を感じていたと指摘する(ノヴァック 2000：32-44)。アメリカのウィルダネス賛美は国立公園や世界自然遺産の

制度として世界に波及するが、この背景にあった汎神論の思想は忘れさられていく。

風景の見方や評価は時代とともに変わる。歴史学のアラン・コルバン『浜辺の誕生—海と人間の系譜学』（1988 邦訳 1992）・『風景と人間』（2001 邦訳 2002）などは、風景に対するヨーロッパの人々の感性の歴史を豊富に紹介し、風景観の変遷とその社会的背景を詳細に論じている。そのなかで「眺望ですら、かつてほどの興味を引かないように見えます」と視覚優位の風景評価に変化の兆しがみられることにふれ、「かつて称賛された多くの眺望が今ではその魅力を失ってしまいました」とヨーロッパの山や丘からの展望景が評価されなくなったことを述べている（コルバン 2002：130、179）。わが国のかつてもてはやされた展望を楽しむ観光地も多くが衰退している。展望のためのドライブウェイやロープウェイなどが廃れている。われわれはもっと心をときめかす超高層ビルからのパノラマや航空機による上空からの俯瞰など新たな視覚を獲得したのである。

社会の変化は風景の見方をも変革する。社会学者のヴォルフガング・シベルブシュ『鉄道旅行の歴史』（1977 邦訳 1982）は、当時の社会状況をふまえながら、旅行の車窓から見る風景について、あたかも百貨店で陳列された商品を見て通りすぎるかのように、主体と客体が分離されてあらわれるようになったと指摘した。シベルブシュはこれを風景のパノラマ化と称した。前景が消え、身体に密着していた風景が変質し、世界は異なるものが差別なしに平板に並べられるパノラマと化すのである（シベルブシュ 1982：主として第4章）。

現代の情報化社会もまた風景にもたらす影響には計りしれないものがある。映画の舞台やアニメの聖地巡礼のように、愛好家という特定の集団のあいだではあるにせよ、普通のアノニマスな風景がある日突然アウラを発する特別な風景に変貌する。また、誰もが風景写真家として、発見した風景をネットで普及する。最先端の情報テクノロジーの発達に支えられた仮想現実（Virtual Reality）、拡張現実（Augmented Reality）と呼ばれる世界、3次元（3D）映像、プロジェクションマッピング、体験型デジタル映像などの普及

論文

もとどまるどころを知らず、今後、風景論に様々な問題を突きつけてくるであろう。さらに、越後妻有の大地の芸術祭や瀬戸内国際芸術祭をはじめとする地域を巡るアートツーリズムという社会現象もまた風景論の大きな課題であろう。現代アートが生み出す不思議な感覚が地域の風景再発見に寄与している。現代アートは衝撃や驚愕を与えることによって、常識に呪縛されていた認識の布置を組みかえ、場所の固定した見方を柔軟な見方へと転換させ、また、場所の記憶や物語を引きだしている。

現在、グローバル化のなかで、より一層地域らしさや地域のアイデンティティが希求されている。農林漁業などの文化的景観、営みに関する生業景観、失われゆく町並景観や里地里山景観、近代化遺産などの産業景観、これらの地域資源の掘りおこしがはじまっている。それは単に歴史的遺産保存や地域活性化の観点だけではなく、われわれの生そのもの、実存に関わっているからである。地理学のエドワード・レルフ『場所の現象学—没場所性を越えて』（1976 邦訳 1991）は場所の個性は人間にとって根源的に必要であり、「意義深い場所と結びつきたいという根深い人間的な欲求が存在する」と述べている（レルフ 1991：306）。そこに生きる人間にとって場所がいかに重要かを語るレルフは、個性のない現代都市を没場所的として批判し、場所性の回復を主張する。地理学の森正人『英国風景の変貌—恐怖の森から美の風景へ』（2012）は、なぜ今、産業遺産が注目され、人々はそれに魅いられるのかについて、産業遺産保護の先進国イギリスを調べ、「イギリスでは、大英帝国終焉とともに、かつて嫌悪した近代産業に対して、憧憬の念が生じている」と指摘し、「来訪者にとって少し前までであった懐かしい生活風景に対する記憶を刺激する。はるか以前の歴史ではなく、自分の小さな頃にはまだ残っていた風景に対する郷愁を喚起するのである」と述べている。人々は地域に「われわれの歴史」を見だし、「自らが生まれ暮らす地域を自覚し直して」、自らのアイデンティティと誇りを形成していくのである（森 2012：17、236-238）。現在稼働している産業は遺産にはなりにくい。それは身近な日常的景観であり、人々の注目を集める非日常的景観にはなりにくい。産業遺産として対象化するには、時間的な隔たりが必要であり、心理的な距離をもつ

た相対化が必要である。森は「過ぎ去った時間を郷愁をもって懐古するには、そのときに感じた痛みや悲しみなど否定的な感情が癒されていなければならない」と述べている(森 2012: 238)。今、すでに、1960年代の高度経済成長時代の臨海工業地帯のコンビナートが産業景観として相対化されつつあるといえる。公害を知らない若い世代が力強い構造や美しい夜景を求めて工場巡りをしはじめている。産業社会から情報社会に枠組みが変わるなかで、産業景観が相対化され、風景化されつつあるのである。今後、明治・大正の近代化遺産のみならず、昭和の高度経済成長のコンビナート、中小企業のものづくりなども相対化されて、産業観光の対象となる可能性が十分にあると指摘できる。また、無知と誤解と差別に基づき長いあいだ離島に隔離しつづけられたハンセン病施設なども否定的な感情が乗りこえられ、新たな交流がおきている。

風景評価研究には以上の事例のとおり様々な背景が論じられてきた。風景論は今後このような社会的背景、経済的背景、文化的背景なども視野に入れなければならないであろう。

(2) 国立公園にみる風景の政治学

地理学の荒山正彦「自然の風景地へのまなざし—国立公園の理念と候補地」(『空間から場所へ—地理学的想像力の探求』所収 1998)は、わが国の国立公園が日本の本来なる風景を選定するとしながら、山岳、溪谷、森林に偏ったことについて「国立公園という制度は、国土を表象するひとつの技法であり、国立公園の候補地は、イデオロギー的なまなざしによってうかびあがった風景である」と指摘した。また、国立公園は生産の空間を審美的な風景地に仕立てあげて、国土空間から選びだし、ひとつのイデオロギーによって関連づけ、オーソライズしたという。そして、これをモジュールや規範として、植民地台湾にも拡大させたという。すなわち、風景とは本来場所に根ざした個別のものであるにもかかわらず、「国立公園」というひとつのイデオロギーに支えられた共通の空間に変貌させたのであり、荒山は「こうした空間の生産・表象に対して、ローカルな社会が自らのアイデンティティをいかにして

論文

確立しようのかという『場所の政治学』が検討されねばならない」と述べる(荒山 1998 : 128-142)。

この論考は空間から場所へという大きな文脈のもとに考察されたものであり、国家権力がある特定の同質の空間を生みだしたことをイデオロギー的なまなざしという言葉で捉えたことは評価できる。わが国の国立公園の山岳、溪谷、森林はまさに言説のなかでつくられた国立公園の表象であった。国立公園は、現実には、農地、草地、採石地、神社仏閣、温泉街、集落、電力施設などを含んでいた。国立公園内の産業や生活は、国立公園の理念を語る言説にかきけされ、大自然という表象の背後に隠蔽された。軍事施設の島沖縄を海洋リゾートの島沖縄とみるようなものであり、アメリカの国立公園から先住民が保護区に追いやられ、日本の国立公園でアイヌの文化が観光化されるようなものである。

アメリカの国立公園もまた原生自然ウィルダネス賛美の場所として、アメリカのアイデンティティとなり、誇りとなり、ナショナリズムを高揚させる場所となったが、それには、歴史のない移民国家、多民族国家、南北戦争、西部開拓、野生動物の絶滅危惧などの社会的背景や、鉄道開発、観光開発などの経済的背景や、何よりも超越主義・汎神論の思想、ネイチャーライティングの文学、ロッキー山脈派の風景画、大自然を捉える写真などの興隆という文化的背景とも関係していた。

1930年代に誕生したわが国初の12国立公園の選定・区域決定と生みだされた国立公園の風景の実態を詳細に調べてみると、そこには多様な力が働き、原生的自然から二次的自然までの様々な自然、自然景観から人文景観までの様々な景観、自然空間から産業・生活空間までの様々な空間を含んでいることがわかる。もちろん原生的自然を核心部とするものの、国立公園がひとつの同質の空間に化したのか、それとも、それぞれ個性ある場所にとどまっているのかは議論の余地のあるところである。理念を語る言説にこそまなざしの本質があらわれているのであろうが、理念と実態の乖離、矛盾、対立には大きなものがある。ひとつのイデオロギー的なまなざしに見いだされた空間だと断じるには多彩であり、あまりにも複雑で多様な力学が働いていたと指

摘できる。

わが国の国立公園制度は私有地を含み、様々な土地利用と共存する地域制公園制度をとった。12国立公園を生みだした関係者は基本的に国立公園と産業などの土地利用との両立は可能だとの建前をとり、その建前を尊重せざるをえなかった。しかし、当時の社会情勢から暗黙の了解で軍事施設だけは国立公園から除外していた。富士箱根国立公園の富士山裾野は不自然な形で陸軍演習場が除外された。逆に、阿蘇国立公園は生活空間となっていた広大なカルデラを含むために、当時の国立公園法を改正してわざわざ制限緩和地区の制度を追加した。産業との両立は尾瀬・十和田湖・黒部溪谷・北山峡などに深刻な問題を抱えていたが、通信省・農林省の強力な発言もあり、また、産業と共存可能という建前もあり、結局、実施段階で国立公園と産業が両立するよう調整を図るという問題先送りとされ、国立公園誕生にこぎつけていた。産業との共存の建前は、行政の力学のなかで、問題先送りや妥協へ導く強力な力となって作用していた。

吉野熊野国立公園は大台ヶ原及大峯山国立公園候補地から名称を変えて、神武天皇東征神話、後醍醐天皇墓所などの皇国史観に関係する場所が選ばれ、山岳・河川・海岸からなる特異な形で誕生し、本来、風景型式の評価からすれば選にもれてもおかしくなかった大山・雲仙国立公園も選ばれた。ここには当時の国粹主義、地元の要望、国土における適正配置、県立公園に配慮する社会的背景や、古来の名山・温泉地、外国人保養地、外貨獲得などの観光振興を図る経済的背景が働いていた。富士国立公園候補地の名称も、鉄道省の外局の国際観光局や神奈川県の高い要望があり、観光振興の力が働いて、富士箱根国立公園という併称に押しきられる。そもそも地域制公園制度も、狭い国土に稠密な人口をかかえ、高度な土地利用をおこなわなければならないという建前があったが、当時は世界的な経済不況と軍事費増大で国家予算は逼迫しており、国立公園にさく予算はないという状況であり、用地取得費や補償費は望むべくもないという経済的背景もあった。

12国立公園は山岳風景を重視し、海岸風景を軽視した。それはアルプスのような山岳風景を重視するという、風景観の問題が最大の理由であった。し

論文

しかし、国立公園選定標準「国立公園ノ選定ニ関スル方針」には明記されていなかったが、景観の問題として、人為の入っていない「原始的風景」と飛地や線状ではない「まとまり」を重視した結果でもあった。飛地や線状は管理しにくいという行政的配慮も働いていた。阿蘇国立公園への耶馬溪編入問題もあったが、日本趣味・伝統的風景観と欧米趣味・近代的風景観の対立として議論があった。国立公園の指定理由はあくまでも自然科学的に景観が評価されるものの、そこには世代間の審美的な風景観という文化的背景も働いていた。

当局は国立公園の利用についても、アメリカの国立公園にならい、登山、探勝、温泉浴、野営、宿泊などの理想的な野外レクリエーションを想定していたが、誕生した国立公園は物見遊山や歓楽型温泉の既存観光地を多く含み、理想とは乖離していた。

国立公園の風景の価値付け・意味付けの内容は建前と本音で異なっていた。そこには、地元、世論、時代などと絡まりあう社会的、経済的、文化的背景が力をもって、複雑に作用していた。戦時下という社会的な力も働けば、国家の主導ではなく、地方の主導もあった。観光振興という経済的な力も働き、ある場合には近代的風景をめざし、ある場合には伝統的風景に回帰する風景観という文化的な力も働いていた。国家による風景のオーソライズは単純ではなかった。

わが国の国立公園は1934(昭和9)年から2016(平成28)年にわたり33カ所が誕生した。この間の約80年間は社会が大きく変動した。国立公園は自然公園法で「我が国の風景を代表するに足る傑出した自然の風景地」と定義されている。国立公園は国家が自然風景の評価をおこない、権威付ける制度であり、当然、国立公園の指定には人々を納得させる科学的景観評価がおこなわれる。しかし、この科学的景観評価でさえも長い歳月とともに、自然美評価、原生自然評価、生態系評価、生物多様性評価などと変化した。さらに、国立公園の誕生には社会、経済、文化などの様々な要因が複雑に絡みついていた。国立公園の選定・区域決定には、わが国の風景を代表する自然の大風景地を重視していたが、わが国固有の地域制公園制度という限界から、また、自然保護空間であるよりは自然観光空間であるという現実から、風景の政治学と

もいうべき多様な力が働いていた。国立公園の専用地域は皆無に近く、どこも農林漁業、電力産業、観光産業などとの共存が図られるように多目的な土地利用が迫られていた。国立公園の創設という風景の権威付けには、単に科学的景観評価のみならず、社会的、経済的、文化的な諸力が作用している。風景の評価が否応なくある種の複雑な力学の場に組みこまれてしまうという風景の政治学のなかにあった。この風景の政治学を考究することが今後の重要な課題である。

謝 辞

この度、記念論文集を刊行していただいたことについて、編集に携わっていただいた関係各位に感謝したい。また、多忙なところ、論文を寄稿いただいた佐山浩関西学院大学教授、岡田昌彰近畿大学教授、滝川祐子香川大学協力研究員、水谷知生奈良県立大学教授、井原縁奈良県立大学准教授にも深く感謝したい。景観、国立公園、瀬戸内海、地域文化などに関する共同研究で研究会や現地調査をおこない、つねに刺激や助力をいただいた。これからそれぞれの分野でますます活躍されるものと思う。この他の親しい共同研究者や、また、研究者になった何人かの奈良県立大学元ゼミ生にも寄稿を依頼したかったが、執筆者数の関係で残念ではあるが断念した。

引用文献・参考文献

- 荒山正彦 1998「自然の風景地へのまなざし—国立公園の理念と候補地」『空間から場所へ—地理学的想像力の探求』古今書院
- 内村鑑三 1894「志賀重昂氏『日本風景論』」『六合雑誌』再掲載『日本風景論』岩波書店
- 勝原文夫 1979『農の美学—日本風景論序説』論創社
- 加藤典洋 1990『日本風景論』講談社
- 柄谷行人 1980『日本近代文学の起源』講談社
- 桑子敏雄 2005『風景のなかの環境哲学』東京大学出版会
- 木岡伸夫 2002「沈黙と語りのあいだ」『風景の哲学』ナカニシヤ出版
- 木股知史 1988『〈イメージ〉の近代日本文学誌』双文社
- クラーク、ケネス 1967『風景画論』岩崎美術社
- コルバン、アラン 2002『風景と人間』藤原書店

論文

- シベルプシュ、ヴォルフガング 1982『鉄道旅行の歴史』法政大学出版局
菅原潤 2006『風景美が引き起こすもの—リッター風景論を中心に』『風景の研究』慶應義塾大学出版会
ジンメル、ゲオルク 1976『風景の哲学』『ジンメル著作集 12』白水社
田中正大 1981『日本の自然公園—自然保護と風景保護』相模書房
中川理 2008『風景学—風景と景観をめぐる歴史と現在』共立出版
西田正憲 2011『自然の風景論—自然をめぐるまなざしと表象』清水弘文堂書房
西村孝彦 1997『文明と景観』地人書房
ノヴァック、バーバラ 2000『自然と文化—アメリカの風景と絵画 1825—1875』玉川大学出版部
ブルクハルト、ヤコブ 1966『イタリア・ルネサンスの文化 一試論』『ブルクハルト』中央公論社
ベルク、オギュスタン 1990『日本の風景・西欧の景観』講談社
ベルク、オギュスタン 1994『風土としての地球』筑摩書房
森正人 2012『英国風景の変貌』里文出版
山野正彦 1998『ドイツ景観論の生成—フンボルトを中心に』古今書院
リッター、ヨアヒム 2002『風景—近代社会における美的なものの機能をめぐって』『風景の哲学』ナカニシヤ出版
レルフ、エドワード 1991『場所の現象学—没場所性を越えて』ちくま書房

参考文献

- 青木茂 1996『自然をうつす—東の山水画・西の風景画・水彩画』岩波書店
アブルトン、ジェイ 2005『風景の経験—景観の美について』法政大学出版局
荒山正彦 2004『近代日本における風景論の系譜』『〈景観〉を再考する』青弓社
アーリ、ジョン 1995『観光のまなざし』法政大学出版局
安西信一 2000『イギリス風景式庭園の美学』東京大学出版会
伊藤銀月 1910『日本風景新論』前川文栄閣
伊藤俊治 1996『ジオラマ論』筑摩書房
伊藤ていじ 1966『日本デザイン論』鹿島出版会
猪瀬直樹 1986『ミカドの肖像』小学館
上原敬二 1924『風景雑記』春陽堂
上原敬二 1943『日本風景美論』大日本出版
上原敬二 1949『風景読本』暁書房
内田芳明 1985『風景の現象学』中央公論社
内田芳明 1992『風景とは何か』朝日新聞社
内田芳明 2001『風景の発見』朝日新聞社
大島洋編 1993『写真家の誕生と19世紀写真』羊泉社
大室幹雄 2002『月瀬幻影—近代日本風景批評史』中央公論新社

- 岡田昌彰 2003『テクノスケーパー—同化と異化の景観論』鹿島出版会
 奥野健男 1972『文学における原風景』集英社
 カー、アレックス 1993『美しき日本の残像』新潮社
 カー、アレックス 2002『犬と鬼—知られざる日本の肖像』講談社
 カー、アレックス 2014『ニッポン景観論』集英社
 川村晃生・浅見和彦 2006『壊れゆく景観—消えていく日本の名所』慶應義塾大
 学出版会
 唐木順三 1970『日本人の心の歴史』筑摩書房
 カールス、カール 2006『風景画に関する九通の書簡』神林恒道他編訳『ドイツ・
 ロマン派風景画論』三元社
 カンポレージ、ピエーロ 1997『風景の誕生—イタリアの美しき里』筑摩書房
 木岡伸夫 2007『風景の論理—沈黙から語りへ』世界思想社
 久保天随 1900『山水美論』新聲社
 小島烏水 1905『日本山水論』隆文館
 小島烏水 1908『山水美論』如山堂
 コナン、ベルナルド 1996『パノラマの世紀』筑摩書房
 小林亨 1993『移ろいの風景論』鹿島出版会
 コルバン、アラン 1992『浜辺の誕生—海と人間の系譜学』藤原書店
 齋藤潮 2006『名山へのまなざし』講談社
 佐藤健二 1994『風景の生産・風景の解放—メディアのアルケオロジー』講談社
 沢田充茂 1975『認識の風景』岩波書店
 志賀重昂 1894『日本風景論』政教社(1975 大修館書店復刻版)
 篠原修 1982『新体系土木工学 59 土木景観工学』技報堂出版
 篠原修編著 1998『景観用語事典』彰国社
 千田稔 1992『風景の構図』地人書房
 千田稔編 1998『風景の文化誌』古今書院
 千田稔・前田良一・内田忠賢編 2001『風景の事典』古今書院
 高島北海 1903『写山要訣』東陽堂
 多木浩二 1982『眼の隠喩 視線の現象学』青土社
 田路貴弘・齋藤潮・山口啓太 2015『日本風景史』昭和堂
 辻村太郎 1937『景観地理学講話』地人書館
 辻村太郎 1958『日本の景観』東都書房
 辻村太郎 1958『日本の山水』宝文館
 都市デザイン研究体 1968『日本の都市空間』彰国社
 土木工学大系編集委員会 1977『土木工学大系 13 景観論』彰国社
 内藤湖南(虎次郎) 1925『日本文化史研究』弘文堂書房
 中村良夫 1982『風景学入門』中央公論社
 中村良夫 2001『風景学・実践編—風景を目きさす』中央公論新社

論文

- 中村良夫 2004『風景を創る—環境美学への道』日本放送出版協会
新島善直・村山醸造 1918『森林美学』成美堂
ニコルソン、マージョリー 1989『暗い山と栄光の山』国書刊行会
西田正憲 1999『瀬戸内海の発見—意味の風景から視覚の風景へ』中央公論新社
西田正憲 1999「瀬戸内海の近代的風景の発見と定着」日本造園学会『ランドスケープ研究』第63巻第1号
西田正憲 2004「自然風景へのまなざしの変遷と新たな風景視点」日本造園学会『ランドスケープ研究』第67巻第5号
西田正憲 2005「自然風景論の基本的諸概念」奈良県立大学『研究季報』第16巻第1号
西田正憲 2007「ヨーロッパにおける自然風景論の展開」奈良県立大学『研究季報』第18巻第1・2号
西田正憲 2008「自然史の風景から人類史の風景へ」国立公園協会『国立公園』660号
西田正憲 2011『自然の風景論—自然をめぐるまなざしと表象』清水弘文堂書房
西田正憲 2014「自然の風景論—自然をめぐるまなざしと表象—」日本造園学会『ランドスケープ研究』第78巻第3号
バーク、エドモンド 2004『崇高と美の観念の起源』みすず書房
長谷川成一 1996『失われた景観—名所が語る江戸時代』吉川弘文館
パノフスキー、エルウィン 1993『象徴形式としての遠近法』哲学書房
樋口忠彦 1975『景観の構造—ランドスケープとしての日本の空間』技報堂
樋口忠彦 1981『日本の景観』春秋社
フーコー、ミッシェル 1969『臨床医学の誕生』みすず書房
富士川義之 1983『風景の詩学』白水社
バルク、オギュスタン 1985『空間の日本文化』筑摩書房
バルク、オギュスタン 1988『風土の日本—自然と文化の通態』筑摩書房
バルク、オギュスタン 2011『風景という知—近代のパラダイムを超えて』世界思想社
松原隆一郎 2002『失われた景観—戦後日本が築いたもの』PHP研究所
南井正廣 2004『ウィリアム・ギルピンの生涯とその出版をめぐる』ユーリカ・プレス
メルロ＝ポンティ、モーリス 1974『知覚の現象学』みすず書房
保田與重郎 1942『風景と歴史』天理時報社
横山俊夫編著 1992『視覚の19世紀』思文閣出版
吉江喬松 1935『山岳美観』協和書院
吉見俊哉 1992『博覧会の政治学』中央公論社
李孝徳 1996『表象空間の近代』新曜社
リンチ、ケビン 1964『都市のイメージ』岩波書店

脇水鐵五郎 1939『日本風景誌』河出書房

脇水鐵五郎 1942-1944『車窓から観た自然界』誠文堂新光社

脇水鐵五郎 1943『日本風景の研究 一名勝の自然科学的考察』春陽堂文庫

渡邊十千郎(萬次郎) 1924『風景の科学』新光社

Chamberlain, B. Mason, W. 1891 "A Handbook for Travellers in Japan"
Murray's,

